

テーマ「ロータリーに夢を」



●パネリスト

津田 進 氏 (川崎北RC)



- 第2590地区パストガバナー
1984～'85年度
- 医療法人 津田病院院長
- 神奈川県眼科医会会長

●パネリスト

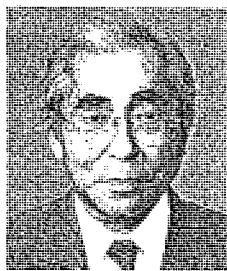
秋山 一 氏 (東京調布RC)



- 第2750地区パストガバナー
1990～'91年度
- 秋山ビルディング(株)
代表取締役
- 桜田倶楽部アジア総合研究所
理事長

●パネリスト

板橋 敏雄 氏 (足利東RC)



- 第2550地区パストガバナー
1987～'88年度
- (株)板通代表取締役会長
- 足利商工会議所会頭

●コーディネーター

田中 善六 氏 (福島RC)



- 第2530地区パストガバナー
1983～'84年度
- (株)クラロン代表取締役社長
- 福島県法人会連合会会長

岩崎綱ガバナー

それでは本日の「ロータリーに夢を」をテーマといたします記念シンポジュームのパネリスト及びコーディネーターの先生方をご紹介します。

まず、パネリストの1人、津田進先生でございます。先生は川崎北ロータリークラブに所属され、同クラブ会長、国際ロータリー第2590地区ガバナー、RI会長代理等のロータリーのご経験をもたれ、お仕事及び公職では、医療法人津田病院院長、神奈川県眼科医会会長等の要職に当たられておられます。

お隣でございます。パネリストの板橋敏雄先生でございます。先生は足利東ロータリークラブに所属され、同クラブ会長、国際ロータリー第2550地区ガバナー、RIゾーントレーニングリーダー、ロータリーの友委員長、RI会長代理等のロータリーのご経歴をもたれ、お仕事及び公職では株式会社板通代表取締役会長、足利商工会議所会頭、足利法人会会長等の要職に当たられておられます。

お隣の3人目のパネリスト秋山一先生でございます。先生は東京調布ロータリークラブに所属され、同クラブ会長、国際ロータリー第2750地区ガバナー、ロータリーの友委員長、RI会長代理等のロータリーのご経歴をもたれ、お仕事及び公職では、秋山ビルディング株式会社代表取締役、桜田倶楽部アジア総合研究所理事長等の要職に当たられておられます。

次に、コーディネーターの田中善六先生をご紹介します。先生は当地区内の福島ロータリークラブに所属され、同クラブ会長、国際ロータリー第2530地区ガバナー、RI会長代理等のロータリーのご経歴をもたれ、お仕事及び公職では、株式会社クラロン代表取締役社長、福島県法人会連合会会長の要職をなされております。

以上、パネリストとコーディネーターの先生方をご紹介します。

それでは、記念シンポジュームどうぞよろしくお願いいたします。

田中善六ガバナー

それでは、早速記念のシンポジュームを「ロータリーに夢を」をテーマとしてこれから始めさせていただきます。

本日、パネリストにお願いいたしましたお3人の



コーディネーター
田中善六ガバナー

先生、よろしくお願いいたします。

我が国の経済は、バブル崩壊とともに、いまだかつてなかった不況に突入しております。金融機関の不祥事、そして破綻といった全く予想もしなかった深刻な時代、今や危機解消の道すら望むべくもない現状であることは、皆さんご存じのとおりであります。このような時代環境は、見方によってはロータリーが創立された1905年前後のシカゴの様相に酷似している錯覚さえ感じるの、私一人だけではないと思うのであります。

このような時代に生きる私どもは、ロータリーを作った始祖ポール・ハリスが夢見た夢を、時計の針を逆戻りさせて、ロータリアン一人ひとりがもう一度知ることが求められるのではないのでしょうか。ロータリーは草創の始めから、今日まで素晴らしい歴史を持っておるはずであります。

その歴史を知ることはロータリーを知ることにもつながることであり、長い年月にわたってロータリアン一人ひとりが職業を通じ社会へ奉仕してきたことが、地域社会の多くの人々に理解され、若い世代の人々によってこの良き伝統が受け継がれ、今日の発展をみたのだと思います。

ロータリーの初期に、「ロータリーは時代とともに親睦と調和の中にある」ということをポール・ハリスは述べております。今や21世紀も間近に迫り、

私どもはロータリーの未来にポール・ハリスが述べた「親睦と調和」を持ち続け、大きな夢を抱くことによって更なる繁栄があるのか、それとも敗退の道を歩いていくのか、現代の社会経済環境から考え、果たしてこれから先にロータリーにどんな夢を見ることができるのでしょうか。

ロータリーの歴史的背景を学び、はじめて未来につなぎ得るといふ仮説も成り立ってくることを考え、まず津田先生からロータリー発祥の地、シカゴの時代背景と、そしてポール・ハリスが草創の時代に描いた夢はどんなものであったのか、語っていただければありがたいと思います。先生どうぞよろしく。

津田進ガバナー

ただいまコーディネーターの田中さんからパネリストの分担として、私にはロータリーの歴史から話してほしいということでした。次のお二人にもそれぞれ何か分担があるようでございますが、私はそういうところから始めたいと思います。ロータリーの歴史を話すとなりますと、まずどうしても1905年、ポール・ハリスがシカゴで3人の友達とロータリークラブの原型的なものを作られた、その辺の時代背景からお話ししなければならぬわけでありまして、今日はこういうシンポジュームで持ち時間が大してあるわけではございませんので、大変簡略な話になると思いますが、まずそういうところから始めさせていただきます。

1905年前後のアメリカでございますが、どんな状況であったかといいますと、18世紀半ばにイギリスで始まりました産業革命の影響というものを、アメリカはまともに受けておった頃でございます。それでアメリカの農園労働者などが、シカゴのような大都市周辺の工業地帯へどんどんと移動し始めておった、そういう時代でございます。

農園労働者が大都市へ、工業地帯へ移っていく、その流れが大変速かった。そのために人口の大量の都市集中化というものが起こったわけです。それで都市計画というものが追いつかない。行政機能がマヒするというような事態が続いていた。

一方、工業生産に携わっている企業家の間には激しい競争が始まっておりました。そのために労働者の福祉などというものは無視して、企業家自身の利

益のみを追求するという風潮がみなぎっていた。特にシカゴはそれがひどかった。

そんな中で、そういうシカゴで、弁護士を開業して間もなかったポール・ハリスは、仕事の方はまあまあだったようでございますけれども、少しも満ち足りた気持ちになれなかった。とうとう少年時代を過ごした祖父母のもと、ニューイングランドのウォーリングフォードという村でありますけれども、そのニューイングランドへ旅支度もそこそこに出発します。

無論その頃、祖父母は亡くなっておりますけれども出発する。そのニューイングランドの人口1,000人足らずのウォーリングフォード村、自分が子どもの頃や、青年時代を過ごしたウォーリングフォード村へ近づくにつれて、遠い昔に過ぎ去った日々を思い出させてくれるものが次々と彼の目の前に現れてきます。リンゴや桃やクルミの大きな果樹林、あるいは牧草地に寝そべる乳牛、子どもの頃に泳いだ小川とか池、そういうものが次々と目の前に現れてくる。

子どもの頃、ポールを引き取って育ててくれたおじいさんと、おばあさんは、大変敬虔なピューリタンであった。そしてピューリタンとしての規則正しい生活を送りながら、自己規制に富んだ高い理想を追求する人々だったわけでございます。今、二人とも亡くなって墓標の下に眠っているわけでありまして、その祖父母二人の懐かしい芸術家が粘土に形を与えてくれるように、自分を形作ってくれたことにそのときポールは気づくわけなんです。

彼は再びシカゴに戻っていく。シカゴの生活にまた戻るわけでありまして、シカゴでは数十万の群衆から逃れることはできない。でも、自分の知っている人はどこにもいない。1つの本質的なものが欠けていました。それは友人の存在であると気づくのです。ほかの人たちも自分のように仲間を求めているとしたら、そこから何か生まれてくるのではないか。ポールの頭の中にニューイングランドの村を思い浮かべながら1つの夢が芽生え始めるわけなんです。

このシカゴの街に、いろいろの異なった職業から、一人ずつ会員を集めた会を組織してみたらどうだろうか。寛容の心を持って、各人の意見を認める会を



パネリスト
津田 進パストガバナー

組織してみたらどうだろうか。かつて自分の村で、ウォーリングフォードの村で経験した、助け合いやうち解けた友情についての計画を彼は思いつくのです。自分の育ったウォーリングフォード村、そこには鍛冶屋が1軒あった。雑貨屋が1軒あった。鍛冶屋は馬の蹄鉄を打ち直し、鋤や鍬の手入れをすることで村人の仕事の手助けをしておりました。雑貨屋は村人の代わりに遠い町まで日用品の仕入に行き、村の人の生活に便宜を与えておりました。

彼が考えついた新しい計画では、一業一人であるために、あのニューイングランドの村のように、自分の仕事は村人のためにあるのだ。相手の役に立っているのだということを容易に認識することができたわけでございます。

自分の職業がこんなにも他の人の役に立っているのかと気がつき、次にはもっともっと役に立つにはどうしたら良いかという考えに、この新しい計画で集まった人たちは考えが進んでいったんです。

ロータリークラブは、私の幻想が生んだ子どもであったとポール・ハリスは自伝に書いております。ポール・ハリスの夢が生んだ子は、かくしてニューイングランドの一寒村から大都市シカゴに移り住むことができたわけでございます。ポールの幻想は次々と広がっていきます。アメリカ国内の主な都市へ、それから世界の国々へと彼は魔法の杖をふるう。そ

の杖の先にロータリークラブが次々と誕生していききました。

しかしながら、やがて様々な事情から、その夢を見続けることが困難になってきております。昭和6年、米山梅吉さんの紹介を受けて、若干26歳で東京クラブに入会した、長瀬富郎さんという人がおります。戦前、花王石鹼の社長を務め、戦後は昭和31年から53年まで実に23年間、ロータリーの友の専門委員として、その発展に尽くした方でございます。その方がこんなことを言っています。

昔のロータリーは、上流の渓谷の美しさであり、今日のロータリーは下流で何万トンもある船が自由に行き来する広さである。今日のクラブの良い点は、組織だってきたことで、それによって文献なども完備して、ロータリーの勉強がしやすくなってきた。その反面、欠点も生じている。そもそもロータリーとはなんだろうか。ロータリーの根本にあるものは、お互い思いやりの心を持って助け合うことではなかったか。この根本精神は昔も今も変わることはないのだが、その学び方が昔と今とは違ってしまった。今の人は文献などを通じて、まず思想として、観念としてそれを学び取る。昔は文献などというものもあまりなかったから、ただ先輩との交わりのおちにおのずとそれを身につけた。先輩は言葉でなく態度でロータリーの神髄を伝えてくれた。口で教えられたものは、口先で真似るだけとなり、知識として与えられたものは、頭の片隅にしまい込まれてしまうということになりやすい。何もかもが形式化し、上滑りしてきたように思われる。そう述べております。

次に、ロータリーは単なる昼飯会ではない。奉仕の理想を実現する手段として集まって、昼飯を食べるのだということを再認識したいと思うわけであり。ロータリーの例会の妙味は、例会に出たならば社長などというつまらぬ仮面を脱ぎ捨てて、ただの人間として出席するところにあります。

私たちは職業柄、平素鬼の仮面を被らされている、仕事の鬼であります。ロータリーの会合に出るときには、この鬼の仮面をまず入口で帽子と共にクロークに預けなければならない。心の内にどんなに暗いこと、辛いことがあっても微笑をもって会場に臨む、これが秘訣であるわけであり。私

虚心坦懐、無心になれば、人と人の心は通じ合うと思います。世の実相もありのままに見ることができないのではないかと思います。ロータリーの奉仕というものも、またこの神通から出発するのではないのでしょうか。かくして例会の時間は魂の慰めとなり、友情は次の1週間への励ましとなります。

ところが、世間の人から見ると、奉仕の理想を実現したいのなら、昼飯ばかり食べていないで、もっと積極的に能率的にやったらどうだと言いたくなるらしい。しかし、ロータリーの神髄は、それがクラブであって、社会運動でも道徳団体でもないところにあると思います。これを理解することこそ、真にロータリーがなにものであるかを知る要点であると思うわけであり。すなわち、ロータリーの特性は、いかなる場合でもその理想をロータリアン一人ひとりの人格を通じてのみ実現しようとしているところにあります。ロータリーにとっては、その理想を性急に、能率的に実現するというよりも、良きロータリアンを作るといことこそ最も重要な問題なのであります。もし、ロータリーが奉仕の理想を能率的に社会に実現しようと考えれば、1年ごとに役員、理事、委員などを改選するなどということは損なことですね。しかし、この制度を良きロータリアンを多数育てようという目的から見直しましたとき、初めてそれがいかに当を得たものであるかが分かるはずであります。

ひところ、集団奉仕か個人奉仕かということで派手な論戦が続いたことがございました。先ほどの長瀬さんは、個人奉仕に重点をおきたいとして、もしも集団奉仕に重点を置くことになると、次のような堕落への道をたどることになりやすいからだ警告を発しています。

第1に、人格の高い人物よりも金回りの良い人を会員に選びたい。第2には、クラブの奉仕活動が慈善団体化し、与える人と受ける人々の間の魂のふれあいよりも、世間的効果を重んずるようになる。これはなかなか厳しい警告でございます。今まで申し上げた2点につきましては、それはおまえの憶測だよと言われてそれまでのことでありまして、引き下がらざるを得ないわけでありまして、次に述べようと思

ます職業分類の問題は、現実に現代企業のかなりな範囲に起きつつある現象であります。

ロータリーは、一業一会員という原則を守ること成り立ってきました。無論今でもそういう職種で会員となっている方は多数おります。何代にもわたって天職として自分の職業の技を深め、徳を磨いてきた会員と、その人とは全く異なった職種の会員が親しく話し合っている光景は、正にロータリーの特色であります。

ところが現代は、経済の変化する速度が大変速くなっております。企業も経済の需要に合わせてはならなくなりました。例えばトラック運送の物流会社が、倉庫や車庫を使って卸売りをするようになる。コンピュータの計算センターがソフトの制作販売をするようになる。また、リスクを分散するために多角化を図って複数の業種を活動範囲とする企業も増えております。

つまり、職業分類のボーダーレス時代を迎えておるわけであり。A会員は、入会したときの職業だけでなく、時代の要請に従って新しい職種を取り入れ、そちらの方が主たる業務になったとします。しかるに、その職種は、既にクラブの職業分類表にも明記されているとおり、B会員の主たる業務であった。このようなことは無論以前からもございました。そのために職業分類の修正という項目がクラブ定款にあるほどであります。しかし、現代は経済事情の変貌する速度があまりにも速いために、クラブ内にいろいろなあつれきを起す機会が増えているのではないかと思います。

長い間、職業分類を考えるときの拠点となってきた、俗に赤表紙と言われた職業分類の概要が廃止されまして、新しい職業分類の原則が採択されたのは1967年でございます。それまでの大分類、小分類なる語を廃して、代わりに関連事業というグループで大きく分類することになりました。以後、職業分類の設定にあたっては、クラブが自主的に創意案すべきであるとしたわけでございます。

このことは世界中の多岐多様にわたる職業を概要1冊では収録しきれなくなったことによるものであるわけでありまして、廃止されたこの概要に付けられている職業についての註がございまして、この註は、ロータリーの基本的な考えを示すもので

ありまして、科学的に準備された職業分類表というものが、クラブ発展の理論的基礎になることを示しております。それから30年を経て現在またクラブが一業一会員を維持していくうえで大変困難な社会事情、経済事情が生じているわけでございます。

会員増強の論議が職業分類を抜きにして数だけで論ぜられますと、すなわち、会員数を増やすことがロータリーの発展につながるのだという短絡的な論調が何の反省もなく、何の科学的根拠もなくして世間に横行するようになりますと、それはロータリーの基本的な性格が、一変するときであると私は恐れている次第であります。ロータリーの未来に向けてどのような夢を描いたらいいのか、このあとお二人のパネリストのお話を聞かせていただいた後で、また述べさせていただきたいと思っております。

田中パストガバナー

どうもありがとうございます。

ポール・ハリスが夢見た1905年当時の状況、そしてそれ以来数々の変遷を経て、ロータリーの歴史が作られていったことを分り易く説かれ、さらに先生のお話しの中に、会員数だけを増やすことがロータリーの発展につながることに疑念など、お話を頂戴いたしまして、大変感銘深くお聞きいたしました。

又、集団奉仕に重点をおくことが、それがまた墮落への道をたどるようになりやすいのではないかと、厳しいご指摘もございました。しかも我々が考えていることについて、非常に率直に大胆に語っていただきありがとうございました。

次に現在世界で120万人のロータリアンが、ポールが描いた夢の実現に活躍しています。また、世界最高を誇るロータリー財団は、1916～1917年度R I 会長だったアーチ C. クランフがアトランタの国際大会で基金をつくらせて何か大きな教育的奉仕を、という呼びかけで発足したものでありますが、ロータリーの発展の歴史の中でロータリーは組織としての歴史がありますけれども、このようにロータリーは行動の哲学でもあったことを示しております。

このように、この20世紀時代はロータリーは職業人として、最も優れた倫理運動を展開してまいったのも事実であります。そんな中で、ロータリー財団

やポリオをはじめ青少年、あるいは高齢化社会、そして米山財団などの数々の奉仕活動を通じまして、クラブとして、また個々のロータリアンとして、ロータリーの夢を追い続け、世界的規模に発展してきた現状を織り込んで、板橋先生からそのようなお話をいただければ大変ありがたいと思うんですが、よろしく願いいたします。

板橋パストガバナー

ただいまご紹介いただきました足利東ロータリークラブ所属の板橋敏雄であります。

本日、この席にこうして座っておりますのは、本年の7月1日のロータリー研究会の席上で、本日パネルディスカッションのコーディネーターをお務めになっている田中パストガバナーから声をかけられまして、私は田中パストガバナーには地区分割の件でたいへんにお世話になっておりまして、ロータリーに親分、子分というのはおかしいんですけども、善六親分みたいな感じでおりましたので、この日空いているかというようなことで手帳をすぐに取り出して、ああ空いていますというふうなことでお受けしたのが今日のこの会になったわけでございます。したがって、今、津田パネリストのお話を伺っております、とても私はその任に耐えないというふうにそういう思いをつくづく感じておるわけでございますけれども、ノーと言えない、お引き受けざるを得ないということで、ここに立ったわけでございます。

私は1992年から94年までロータリー財団のリージョナルコーディネーターというのを仰せつかりまして、財団の振興ということを知らしめるという役を仰せつかりましたものですから、現場の経験が非常に長かったといえますか、そういうことからいたしまして、ロータリーの現況を踏まえてのロータリーの夢を実現していくためには、どのように考え、どのように行動したらよろしいかというふうな多少プラグマティックな話になりますけれども、お話をさせていただきたいと思っております。

前々会長のルイス・ジアイ元会長が編集されました「過ぎし日に敬意を表して」というご本の中に、ポール・ハリス語録が載っております、それを読んだときに私は、ポール・ハリスがいかに長期のピ

ジョンのもとにこのロータリークラブを発足させたかということに大きな感動を覚えました。実は1918年の国際大会でございますから、ちょうど今から数えて80年前でございます。その国際大会においてポール・ハリスは、このように演説をされているわけがあります。「ロータリーは、今後華々しく開花するに違いありません。わずかな年月で43カ国に拡大したこの運動は、あらゆる国に広がるまで波のように押し寄せる運命をたどるに違いありません。そして、すべての国に広がったときが、その広がった地域を力強く耕すときなのです。なすべきことはいつでも十分にあります。人類を向上させる運動の倫理的概念だけが、すべてを包み込む概念です。ロータリーはすべての人の生活に影響を与える運動となるまで、決して自己満足してはなりません。」人類を向上させる運動の倫理的概念だけが、すべてを包み込む概念。ロータリーは、すべての人の生活に影響を与える運動となるまで自己満足してはなりませんというふうに、今から80年前の国際大会でポール・ハリスは演説をされているわけがあります。

現在159カ国、120万人を上回るロータリアンが2万8,000を上回るロータリークラブで、職業を通じて地域社会の奉仕のチェーンを組んでいるわけがあります。正に80年前のポール・ハリスの予見どおりとなってきているのではないのでしょうか。私は1996年のカルガリー大会、97年のグラスゴー大会、98年のインディアナポリス大会と3年連続で国際大会のS A A を務めさせていただきました。世界中からロータリアンが来られまして、その人たちと握手をして、あるいはまた抱擁しあって、そういう機会を得た私は、正にこのポール・ハリスの予言を感慨として、実感として確実なものにしておるわけがあります。

チーフS A A からの手紙によりますと、まずスマイルを忘れるなというふうに言われました。2番目には、規律はしっかりと守るように指導しなさい。3番目には、たくさん歩くから履きやすい靴を持ってこい。この3箇条はいつも毎回達せられるわけがあります。肉体労働に近い労働ですけれども、世界の大勢の人たちと会えて、しかも握手が交わされると喜び、これはもうやはり1日1万5,000歩以上歩くことに代えられない喜びとして私に戻ってきているのであります。



パネリスト

板橋敏雄パストガバナー

人類を向上させる運動の倫理的概念だけが、すべてを包み込む概念だと、素晴らしい考え方ではないでしょうか。この運動の具体的な支えとなったのは、実はロータリー財団の運動であります。いささか簡単ではございますけれども、ロータリー財団の歴史にふれさせていただきたいと思っております。

1917年、ジョージア州アトランタの国際大会で、先ほどお話が出ましたように、第6代アーチ・クラフ会長によって、ロータリーが基金を作って世界的な規模で慈善教育その他社会奉仕の分野で何かよい仕事をしようではないかという提案のもとにスタートしたロータリー財団でありました。しかし、その後約30年間は第1次、第2次世界大戦という波の中で大きな発展もなかったわけですが、1947年の1月27日、ポール・ハリスが逝去されまして、全世界からの弔意が集まったわけがあります。

実に70カ国以上、30万人のロータリアンの弔意がロータリー財団の大きな転換点になったと申せましょう。翌年の7月までになんと130万ドル以上が寄せられたのであります。1951年にこの主唱者でありましたアーチ・クラフ6代会長は逝去されましたが、彼は自分の夢が実現され始めるのを目の当たりにできた幸せな方ではなかったかと思っております。1951年までにアーチ・クラフが当初考えたような、国際奉仕に貢献する団体にロータリーが発展していたから

であります。

その理由として考えられますものは、第1に、第2次世界大戦の終結であります。2番目には、ポール・ハリス記念基金の創設によりまして、財団の財政的基盤が安定したからであります。第3には、教育的プログラム、ロータリー財団奨学金プログラムによりましてロータリーの目標と理想をかなえ、ロータリアンの心をしっかりととらえるプログラムが発見されたからであります。

1947年にスタートしたこの教育的プログラム、ロータリー財団奨学金制度は、18人で始まった奨学生でありましたが、なんと97年6月でその累計を見てみますと、総数は3万人に達してあるわけであります。そして、それらの人たちはそれぞれの国を動かす外交官、あるいは経営者、芸術家になった方もたくさん出ているわけであります。日本から選ばれた奨学生総数は5,429人になりまして、国連難民高等弁務官の緒方貞子さんは、日本からの第2番目の奨学生として多くの方に知られるところであります。

また、1957年には、財団は財団の活動に寄附した人々への感謝を示す手段として、ポール・ハリス・フェローの認定を開始いたしました。これは募金への大きな励みになりました。私のロータリークラブ、足利東が姉妹クラブを結んでおりますロスアンゼルス市のロンデルロータリークラブの場合を申し上げますと、30名という小さなクラブでございますけれども、何と187人のポール・ハリスを擁しているわけであります。そして、それをクラブの大きな誇りにしております。

全世界のポール・ハリス・フェローの総数は60万人を超えました。また、1965年には研究グループ交換プログラムがスタートしております。そして、この運動は今日もご紹介がありましたように、約6,500チームにのびます。日本から海外を訪問したチーム総数は276チームに達しております。このプログラムほど地域社会の国際人を養成するのに誠に大きな効果を示すプログラムはないと私は思います。

また、1965年には同額補助金のプログラムがスタートいたしました。そして1978年に3Hプログラム、保健飢餓追放および人間性尊重のプログラムがスタートしたわけでありまして、その最初のプロジェクトとしてフィリピンへのポリオ予防接種計画に75万

ドルが支給されたわけであります。

1985年、国際ロータリー創立80周年を記念いたしました。86年の規程審議会において国際ロータリーは一丸となってポリオプラスを支持することが決議されました。そして、ロータリーが初めて世界保健機構、WHOと協力をして、2005年ロータリーの100周年までに世界からポリオを撲滅しようという壮大な計画が実現しつつあるわけであります。

先ほどR I 会長代理さんのお話にもありましたように、4億ドルという多額の資金が用意されなければならないというふうなことでもございますけれども、118カ国にわたりまして10億人を上回る子どもたちに、この予防接種が既に実施されている実績を見ますと、これは大変なことではないかと思うのであります。

このように財団のプログラムの変遷を見てまいりますと、このプログラムがすべてパートナーシップが基本になっていることに気がつきます。ロータリー財団奨学金プログラムは、当人と財団の関係、そしてまた派遣地区と受け入れ地区のパートナーシップによって成り立ちます。研究グループ交換プログラムは今日もご紹介がありましたように、正に受け入れ地区と送り出し地区のすばらしいパートナーシップの現れであります。

同額補助金や3H補助金にいたしましても、クラブや地区間の国際的プロジェクトを通じて財団と地区又はクラブをパートナーとしていることは間違いありません。ポール・ハリスの夢や、そしてアーチ・クラフの夢、これが全世界に広がってロータリアンのスクラムと、そのすばらしいチェーンの中で生まれるパートナーシップで豊かに実り、その広がった地域を力強く耕すんだというポール・ハリスの最初の言葉が、今、人類を向上させる倫理的概念に貫かれながら達成の道を歩んでいると言わなければならないと思うのであります。

本年度のジム・レイシー会長は、" Follow Your Rotary Dream " というテーマを発表されております。「ロータリーの友」8月号に、1998年の研修リーダーの渡辺パストガバナーが、「Why I am a Rotarian?」という問いかけに対し、レイシー会長は" Because I CARE. / " というふう

言葉は誠に味わいの深い言葉であります。私にとっては、サーブという言葉よりも響きがよく感じられます。サーブよりもはるかに相手の身に思いを寄せて、そして奉仕をするという、そういう感じを与えるからであります。前会長のキンロス会長の、ショウ ロータリー ケアーズも同じ発想の原点ではないでしょうか。

先ほど津田パネリストもおっしゃいましたように、今、我々を包んでいます時代は誠に変化が激しいわけでありまして。人類向上のために耕すべき地域のニーズも、形も内容も複雑になり、その格差もますます大きくなってあります。ロータリアンの夢の実現にもっとより細かな配慮、ケアが必要になってきているのだと私は思います。

ガバナーが今日のごあいさつの中で、不易と流行という言葉をご説明になりました。私もそのことに触れて申し上げてみたいと思うわけでございますが、不易とは、いかに時を経ても変わってはならないもの、すなわちロータリアンにとっては創始者ポール・ハリスが示し、ロータリー綱領にもうたわれている事業及び専門職務の道徳的水準を高めることではないかと思えます。新聞を賑わす官僚の汚職の問題や、経営者の間にも、かつては考えられなかったような大きなおごりが目立ってきております。職業の倫理が今ほど問われるときはない、私はそう思います。ロータリアンが率先して、不易としてこれを地域社会に示すべき時がきているというふうに思えます。

また、流行とは時代と共に変わりゆくものでありまして、ポール・ハリスは亡くなる前の年のロータリー記念日、すなわち1946年の2月に講演をされまして、このように申されております。「ロータリーの開拓時代は今始まったばかりと考えたい。これまでと同じぐらい、しなければならぬことがたくさんある。ロータリーは、絶えず開拓者でなければ時代に取り残されることになる。」とおっしゃっているわけでありまして。時代の流れは速い、いつもこのケアの感性を研ぎ澄ませて、できることから行動に移さなければならないと考えるものであります。

「継続は力なり」という言葉がありますが、もちろん夢を実現するのはそうたやすいことではございません。したがって、継続の力は誠に大きなパワーとなって影響を与えます。しかし、今日のように変

化の激しい状況の中にありますと、単なる継続はむしろマンネリにつながることにほしくないでしょうか。皆様方のクラブの奉仕事業の中にも年々継続するだけで、その奉仕の意義を再確認することもなく続けておられる行事はないでしょうか。周囲の大きな変わり方を、ケアという相手に身を寄せるようなその感覚で研ぎ澄まして見てゆくときに、今ロータリアンでなければできない新しい奉仕が見えてくるのではないのでしょうか。そして、それを肩肘張らずにできるものから実行していく奉仕の喜びがしみじみと湧いてくるのではないかと思います。この善意のサイクルが見直されなければならない、そういう時期に私は今さしかかっているのではないだろうかと思えます。

どうも最近のロータリアンには、行動の萎縮が見られるように、そういう気がしてなりません。日本全体を包む未曾有の不況によるものではないでしょうか。しかし、我々は今こそポール・ハリスが50年、100年というロングレンジの夢を、力強く我々に説いてくれたことを、思い出さなければいけないときではないかと思うのであります。

私は、二度のG S E グループリーダーを経験いたしました。オーストラリアや米国のロータリアンが実にこまめに家庭集会、クラブ委員会を開催して地域社会の新しいニーズを探し、積極的にこれに応える方法を楽しく語り合っている場面に何回も遭遇しました。R I からは最近要求ばかり多くなってきたと、ぼやきの多い日本のロータリークラブと対照的に思い出されることであります。W C S のメニューやロータリー財団の新しいメニューも、多い方がよろしいんじゃないでしょうか。その中から自分たちのサイズに合ったものを選べばよいのですから。

国際日本文化研究センターの梅原猛所長は、「人間逆境の時にこそ大きな夢を見、高い理想に生きることが一番現実的ではないか」と言っておられます。また先生は、「夢は見るだけでも楽しい、これを実現することは、それ以上に楽しい」とも言っておられます。私は以前、富士通本社をお訪ねしましたときに、山本卓真会長から「夢を形に」という著書を頂戴いたしました。それを読ませただいて以来、この言葉を座右の銘にしておるものであります。夢を形にするには、事実、多くの痛みを伴うこともあ

り、また今までの慣れたやり方を捨てなければならぬこともございます。それに耐えていくためには強靱な上昇志向が必要であるというふうに山本会長は言っておられるのであります。

私たちロータリアンは、自分たちの住む世界を平和で安全なものにしていくという大きな夢を抱いています。この夢をいかにして現実の舞台に引き下ろして形にしていくかが問題であります。私は思いますのに、夢を現実のものにするためには、まず自分自身がロマンチストとしての感性を錬磨する必要があります。ロマンチストの感性とは何でしょうか。善意をもって見る、根あかな考え方に起因いたします。不屈なバイタリティが必要です。現状にとらわれない柔軟な発想こそが、この感性を育むと思えます。

次に、リアリストとしての持久力の効果が必要です。ロマンチストだけでは夢は現実になりません。そのためには、課題をクリアする、目標をクリアする分析力と行動力を培わなければなりません。これは各クラブの奉仕事業においても同じではないかと思えます。何よりも大切なのは、周囲の人たちとの間に深い理解に基づく強い人間関係を構築する技術といますか、そういう考え方です。これこそが私は思いますのに、ポール・ハリスが永遠のテーマとした親睦と奉仕のチェーンではないでしょうか。

Follow your Rotary Dreamであります。

田中パストガバナー

板橋先生どうもありがとうございました。

聖書の教えの中に「一粒の麦死なずば、唯一粒の麦にてありなん、死なば多くの実をむすばん」という言葉があります。正に、ロータリーというこの一粒の麦の穂の芽が、ポール・ハリスが夢みたその夢の実現のために多くの人々の努力をなされたことが、現在のすばらしいロータリーの発展につながったのです。そして夢を見ることの楽しさ、また、それを実現することは更に楽しいという、すばらしいお話を頂戴いたしました。先生、どうもありがとうございました。

それでは、先ほどお話の中にありましたように、時代の流れと共にロータリーも変わるべきであるというふうなお話もございました。今日のように変化

の激しい時代にあつては、変えることのできるもの、変えてはならないもの、おのずからあるような気がいたします。私は、絶対に変えてはならないもの、それは綱領にある「奉仕の理想」であろうかと思えます。すなわち、その理想とは、他人に対する思いやりと他人のために役立つことであると言っています。

最後に、パネリストの秋山先生に、お二人の先生方が述べられた歴史的事実を踏まえて、未来のロータリーのあるべき姿はどんなものになるだろうか、中国四千年の歴史の中で孔子の教えに、このような乱世にはゆっくり落ち着き学びの姿勢が問われると言っています。我々が歴史を学ぶことは、単に過去を追憶するためだけではありません。過去を学ぶことによって、初めて現在を正しく認識できるのではないのでしょうか。過去、現在の正しき認識を踏まえて、初めて正しい未来を展望することができると思うのです。まもなくやってくる21世紀、ロータリーに夢を、どんなものに展開してゆくののでしょうか。その辺の未来へのロータリーの夢を語っていただければ有り難いと思えます。先生、どうぞよろしくお願いいたします。

秋山パストガバナー

ご紹介いただきました秋山でございます。

先ほど板橋パネリストが言われましたように、私も7月1日に田中大先輩につかまった1人でございます。うっかり「やあ」と声をかけたら、「ああ、会いたかったよ。実は……」という話になりました。田中先生ご夫妻は、ベネズエラのカラカスで4年前に開かれました規定審議会、大変厳しい4日間を、おかげで非常に楽しく友情を温めながらやり通した覚えがありまして、大変ご恩を感じておりました。しかしロータリーにノーはないという言葉の重みをこのときほど強く感じたことはございません。

実は、この同じパネリストの方々、津田先生は私がノミニーに指名されたときに、真っ先に先生の著書を頂戴して勉強した方でありまして、板橋パネリストは、私がロータリーの友の副委員長を3年間務めました、そのときの委員長さんで、ご指導を受けたものでありますが、こうした方々といっしょに話をする辛さをかみしめたわけでありまして。

そこで、ロータリーにノーはないと私も言われたり使ったりしますけれど、「まるでファッションみたい」と言われたことがあります。しかし、みんなが喜んでこれをつかっている。一体これは文献がどこにあるのかと思って、調べるより知ってそうな人に聞く方が早いものですから聞きましたところ、“to do your parts, when you ask for.”というガイガンデガーのロータリーの通解に書いてある。「頼まれてノーというなよロータリー」と訳してあるんだそうです。

ところで、田中コーディネーターが私に与えた課題は、「過去を学ぶことは現在を正しく知ることだ。過去、現在を正しく認識した上で未来を展望する、その21世紀の夢を説いてください」と、こういう非常に難しい過酷な課題を頂戴いたしました。ただただ、当惑するばかりではないのですが、歴史を話せという勉強する材料もございませんが、未来を語れといってもなかなか勉強する資料がない。弥勒菩薩みたいに片方の膝でも立てて、こうやって考えてみたけれども、いっこうに良い考えは浮かばない。

そこで、現在のレイシー会長のテーマ、メッセージ、あるいはロータリーの夢ということに関してお話になったものなどをよく見てみました。レイシーさんは、まずロータリアンの心、人の悲しみを自らの悲しみとしていっしょに悲しむ、人の喜びを自らの喜びとして喜ぶことのできるような、そうした温かい人間の心、所謂ロータリーケアーズこうした思いやりの心を持った人が現実をしっかり見据えて、そこから夢が生まれるのだ。そして、この夢はその夢を見た人を行動に駆り立てるものなんだと言っておられ、そして、夢を追い求めようというこの自分のテーマは、みんなに対する行動への要請なんだという言葉で結んでおられます。

ロータリアンの“思いやりの心”をもって現在を見据えること、これが将来の夢を生み、未来への正しい生き方を見定める一番大切なことではないかと思うようになりました。

そして今日は、何か会場の皆さんといっしょに、これからの21世紀をどうあるべきかということと一緒に考えていただきながら、私の務めを果たしたいと思っております。



パネリスト
秋山 一パストガバナー

この間岩崎ガバナーからいろいろお話を伺ったこともございますが、特に7月1日発行のガバナー月信に掲げられている数行の言葉に私は非常に打たれました。「安閑として手をこまねいて未来を待つような状態ではない今日、不確実な未来に備えるために私たちはロータリーの夢を追い続けなければなりません。ロータリアン一人ひとりが心に夢を育むこと、その夢を友人ロータリアンに訴えること、その夢の実現にすべてのロータリアンに行動の要請をすること、また、ロータリアン一人ひとりが夢を忍耐強く追いつけること、その夢は先達ロータリアンが追いつけてきた夢であるばかりでなく、新しく育まれる夢も含まなければいけない。こう私はレイシー会長のテーマを自分なりに解釈しております。」と、こういう文が載っておりました。正にそのとおりであるというふうに私は思っております。

レイシー会長のメッセージの中に、「今ロータリーは大変な節目を迎えている。新しい21世紀を迎えると同時に、ロータリー100年期から20年へステップインしようとしているんだ。」そればかりじゃない、期限1000年期を終えて2000年期を迎えようとしているんだ。1000年期のことをミレニウムというふうに言っているらしいですが、セコンドミレニウムに入ろうとしているんだと。こうした転機に臨んで、我々は現在を見つめて夢を持つてうではないか、夢は

我々を行動に駆り立てると、こう言っているらしいのでございます。

そこで、未来を見定めるためには、田中コーディネーターが言われるように、現在をしっかりと認識しなければならない。ある学者はこんなことを言っております。「人間は、所詮後ずさりをしながら未来に向かって進むものである。未来は全く未知である。何が起こるか分からない。我々は、今まで起こったことを参考にして“このような事が起こったらかくなった”という過去の事例を参考にして、それを唯一の手がかりとして未来に向かって歩いてゆくのだ。」と言っています。しかし、我々には未来を見据えようとする英知と、そしてどうしてもやむにやまれないロータリーケアーズから発した「こうすべきだ」「こうなってほしい」という希求、望み、してみせるという決意と努力がある。きっと後ずさりではなく、しっかりした夢を見据えながら歩くことができるのではないかという確信をもっている。これがロータリーの夢、力強い夢ではなからうか。

さてそれでは100年前はどうだったか、先ほど歴史でいろいろお話いただきましたのでよく分かったのでありますけれども、こうした過去、20世紀の100年の歴史は、その前の100年に比べて大変な勢いで変化をしていったということも事実であります。100年前には何が起こったか、ちょっと年表で調べてみますと、ライト兄弟が飛行機で飛んだ、つまり人間の足を地上から離して飛翔させることができた。この事実が更にこの世紀の間に人間を月までも運び、また更に宇宙へも飛翔しようという時代になっている。

また、その前の世紀に生まれた産業革命というのが、相次ぐ技術革新に次ぐ技術革新によって、資本主義が成熟に成熟を重ね、貧富の差の増大や社会的矛盾なども生み、共産主義との確執もありながら、大きな変化を遂げていった。技術革新が進めば進むほど能率主義になり、その極端な能率主義は激しい分業過程の中から、ただ自分の部分さえうまくいけばよい、更に競争の激化から自分の利益さえ考えればよいという、利己心の極端な行き過ぎ、そして人間の心の荒廃が進んでしまったというのが今世紀の100年の歩みではなかったかと思うのであります。反省なのであります。

こうした時代、その100年前にロータリーは、あたかも清涼剤のごとく、力と力との関係ではなく人間愛、そして社会に対する道義、倫理、自らの職業を通じての奉仕ということを掲げて、この時代に対処すべき道を開いてきたのであります。相手の立場に立って考える思いやりの心で、そして分かち合いの精神で、何よりも自らの選ばれた職業を通じての奉仕、つまり自らの職業を倫理的にも高めて、世の中のためになるようにすることを、実践してきたのであります。こうした職業奉仕は決して空念仏でなく、本当に実践されていたことと我々は知らなければなりません。

1910年代に倫理綱領ができ、そして、これがまだ出来上がって20年ほどの非常に若いロータリーが実践に取り組んで、そして自らの会社を改造し、また社会にもその公平な、あるいは相手の気持ちになって考えるということ、自らの事業に適用し1930年代の世界的不況を、ロータリアンはこの理念で乗りきった歴史的事実を知るべきだと思います。これが一般社会に非常に受け入れられ、なるほど、ロータリアンの会社ならば信用できる、取引をしても信用できる、ロータリアンのマークのあるお店なら適正な価格で、今は在庫がなくなる時期だから高く売るとか、人によって高く売りつけるとか、競争相手を蹴落とすために、安く売ったりするようなことのない、信用のおける店だといって、店頭でロータリーマークが光り輝いた時代があるんだということ、改めて知らなければなりません。

だんだん職業奉仕というものが、観念的になって来たのではないかという反省を、今すべき時だと思うのであります。私はロータリーは立派な1つの文化である、人間が今世紀につくり上げた文化であると思うのであります。しかも世界を縦断的に結合させているこの文化、その担い手は正にロータリアン一人ひとりの心の中にある人間愛であり、思いやりの心であります。また、このロータリアンが育つクラブこそがこうしたものを支えていく、唯一の権威ある単位として存在するのであります。クラブこそロータリーの奉仕の心を養う場、人生道場でなければならない筈であります。

時間の都合上端折ってまとめて申しますと、これからの世紀は、こういう意味で絶対に心を、人間の

温かい人間愛の心を、取り戻すべき世紀にならなければならないと思うのであります。「暖かい人間の心の回復」こそが来世紀のテーマでなかろうかと思っております。そして、この心こそロータリーの基本であり、ロータリーもその基本に一度戻って、一人ひとりがロータリーの奉仕の心をもう一度しっかりと心に刻み、ロータリークラブはその心を養うファームとして、また新しく入会した人を包み込んで、友情の中で彼らを立派な奉仕者に仕立てていくというクラブの基本的なものを作り上げなければならない。クラブの強化、教育の場としてのクラブの強化、これがこれからの大きな問題になるのではないかと思っております。

先ほども、また昨夜の晩餐会で呉在環 R I 会長代理が申された言葉が非常に心にしみました。それは、「もしロータリーの組織をピラミッドの形で表現するならば、それは正に逆三角形のピラミッドだ。一番上にあるのは個々の会員である。個々の会員は1つの尊厳を持っているものである。自分の意思によって行ふ奉仕であって、何人もこれを統制し命令することができないものなんだ。これこそロータリーの精神なんだ。」という言葉がありまして、非常に感銘をいたしました。そして、職業奉仕というものを単なる観念的なものになりがちな現在、これをもう一度実社会に適用し、それを実践する、またその方法をクラブで十分に検討をし、また一方において、現在120万とも言われるこの大きな組織、これは人類に対して1つの責任ある単位だと思っております。こうした人道的プログラムも、こういう難しい時代ではあります、こなしていかなければならないと思うのであります。

ポリオプラスという本当に我々の誇るべき人類のための感激の大きなプログラムが、あと少しの努力で、いや、まだ相当の努力を続けて、目標の年に何とか絶滅の宣言ができるようにしたいものです。その力は何か、ただお金を集めるということではありません。1991年の8月にペルーでルイス・テノリオ君という子どもが熱を出して、その熱がポリオの発病であるということが分かった。そのときは、もう南北アメリカではポリオの発生はほぼ絶滅されたと、発生はもうないだろうと思われたときに、思わぬポリオが発生したのであります。そして、

その後は期待どおりポリオは南北アメリカから出なくなりました。このテノリオ君が5歳のときに、その当時の R I 会長がその子どもを抱いて心の中でつぶやきました。「ルイス君、ごめんね。私たちの運動がもう少し早かったならば、君はポリオにかからなくて済んだのに。ごめんなさい、ルイス君。きっと我々は地球上からこの不幸なポリオをなくしてみせるよ。」と心に誓われたと申します。

この記事がロータリーワールドに出て、その記事を読んで本当に心から感動を覚えたのであります、こうしたロータリアンのたくさんの方々の感動が、最初に決めた期限を越えて、また金額も超えて、みんなの力によって完成するときに間近だということになっているのであります。こうしたロータリーの基本的職業奉仕をはじめとする、4大奉仕と R I・R 財団の行う人道的プログラム両方の奉仕、本質的な奉仕と、我々の責務とも思われる全体的な活動、この両方が相まってこそロータリーは今後「社会の中にロータリーあり」その貢献のおかげで、こんな平和な世界がきたのだと、言われるようになるのではないのでしょうか。未来のロータリーの夢は、皆さん方一人ひとりのロータリーの心の中にあり、それを行動に移すことにあり、そして目の前の事実をしっかりと見据える目の中にあると、こう思うのであります。

具体的な提案が少なく恐縮ではございますが、まず、ここで一段落させていただきます。

田中パストガバナー

どうもありがとうございます。

今年の6月30日、ガバナーから今日のテーマを示されました。パネリストの先生方をお選びいただいたという要請を受けました私は、7月1日に東京でお会いするガバナー、パストガバナーの皆さんの顔合わせに初めてこの問題についてお三人の先生にお願いをいたしました。いずれも国際的な、我が国においても第一人の人であるということと皆さん今までの発表でお分かりになったことと申します。私は、お三人にお願いしたことを誇りと思い、そしてまた、すばらしい格調の高いお話を頂戴したことを喜んでおるもの一人であります。本当に先生、ありがとうございました。

そこで先生にひとつ、津田先生は非常に文献、あるいはまた現在は文献の翻訳とかいろんな面でもご活躍なされ、また1987年、89年度ロータリーの情報セミナーが本県で253地区時代にごさいました。その時代におけるリーダーでもあらせられる方あります。私は長い年月にわたって久しくお付き合いをいただいておりますもの一人ですが、先生はロータリーについて、私の心を開かせてくれた心の師でもあるわけでありました。先生に、この際だからお伺いしたいんですが、何か歴史に前例のないことが今起こりつつある。先生、このような時代に私もロータリアンとして、どんな心構えというものを持つべきであろうかということをちょっとお話しただければ有り難いのですが。

津田パストガバナー

先程来、ガバナーが不易と流行というお話をなされた。板橋さんもそれを取り上げられて大変良いお話を聞かせていただきました。

不易と流行というのは、確か俳諧で使われた言葉だと思っております。松尾芭蕉あたりから出たものではないかと思っておりますが、これは日本の言葉ですけれども、イギリスの、今はもうなくなっておりますが、世界的歴史家でありましたアーノルド・ジョセフ・トインビー博士という人が、正にこの不易と流行というのを歴史学的に解説しておるんですね。しかもそれは第二次大戦が終わって10年経った頃日本へ、トインビー博士が参りまして日本の各地で講演をしている。その中でこういう話をされておるんで、ちょっと申し上げてみたいと思います。

トインビー博士は、こういうことを言っているんですね。文明と呼ばれているものは数世代、何代かにわたって築き上げられてきたものが文明である。しかも、その文明というものは相受け、相伝えられていかなければ文明とはならないんですね。しかしながら、その文明というものはずうっと同じ状態にいるかということそうではない。世代が交代する度ごとに風俗とか習慣が変わっていきます。江戸時代を見ても風俗というのは年々変わってきている。それから、ものの考え方も変わってくる。私なんか少し若い方を見ますと、まあ同じ日本人なのかと思うような考え方を持っている。そういうふうにももの考

え方も変わってくる。

文明というものは、親の代から子の代へ伝えられ、受け継がれていく度に、そういういろいろな変化があつて社会的遺産、文明というものは変わっていくものだということですね。それは何も、わざわざ変えているわけじゃない。親の代も子の代もそれぞれ前の世代から受け継いだものをそっくりそのまま伝えようと努力しても、その努力にかかわらず社会的遺産、文明というものは漸次変えられていく。そういう事実をトインビーは見まして、伝統というものには断絶があるのだろうか、全く変わってしまうものなんだろうか、あるいは忘れ去られてしまうものなんだろうか、あるいは何か政治的に、あるいは武力的に抹殺されてしまうものだろうか、そういう疑問を持つわけなんです。

トインビー博士は歴史学者ですから、いろいろな歴史の諸々の教訓というものが、長く数世代にわたって伝えられていくことが可能であろうかという疑問を、自分に問いかけて研究するわけですね。いろいろな多くの歴史的経験を、歴史的な事実を研究し、あるいはそういう経験を踏まえた、自分自身での経験も踏まえたうえで、こういう結論に達するんです。社会を構成している人々の念頭に非常に深く刻みつけられたもの、そういうものは幾世代にわたっても記憶されることがある。例えば戦争の記憶、原爆の記憶、こういうような非常に深く刻みつけられたものは幾世代にもわたって長く記憶される。そして心に刻まれ続けて、それ以後の行動の基礎とされる、そういう伝統もいくつかはあり得るという結論に彼は達するわけなんです。

これは私の意見でありますけれども、ポール・ハリスによって始められたロータリー運動というのは、正にその1つに入るのではないかというふうな考えをしております。ポール・ハリスが、先ほどもちょっと申し上げましたが、心の許せる仲間とシカゴに初めてのクラブを作った。どういうことで作ったんですかという質問を受けて、寂しかったからだ、それだけ答えているんですね。寂しかったからだということは、単なるセンチメンタルな発言じゃございませんね。私はこれを少し分析して書いたことがございますが、今日は時間もありませんから分析はしませんけれども、寂しかったからだというのは、ポー

ル・ハリスの場合は人と人生に対する深い洞察から、そういう発言が出たというふうに思います。

だからこそ当時の人々の心に深く刻みつけられ、ロータリーというものが世界中に広がっていったんだと思うんですね。そういう人の心に刻みつけるなにもものかを持っていたわけなんです。そのロータリーの伝統、ポール・ハリスが言った寂しかったからだという、そういうロータリーの発生の伝統というのは、今日でもやはり多くのロータリアンの胸の中に生き続けておる。静かに流れ続けている、そういうことを私は感じ取っております。皆さん方も恐らくそういうものを感じ取っておるのではないでしょうか。

ですから、ロータリーについていろいろな状態が出てきております。先程来お二人もいろいろお話になりましたが、いろいろな問題が起きておるけれども、しかし、ロータリーを愛する方々はこんなに大勢いらっしゃるわけですね。それは、やはり皆さんの胸の中にポール・ハリスのロータリー発生のときの寂しかったからだという、そういう文化的な遺産が残り続けておる、そういうふうな思っております。

とにかく、今は産業経済の格差とか宗教の違い、あるいは民族の問題、そういうような様々な要素が地球規模に広がったロータリーにも押し寄せている。それがいろいろな活動になり、問題になり、いろいろなことを起こしておるわけですけども、しかし、恐らく今後、今、田中さんがおっしゃったように、歴史に前例のないような事柄が起こるのではないかと、そういうような予想もいたします。

そういう時代に、私たちは何をよりどころにしたらいいのか、ロータリアンとして何をよりどころにしたらいいのか。そうしますと、トインビーはこれはロータリーについて言っているんじゃないんですが、こういう時代についての修得しなければならぬ美徳についてトインビーが言っておりますのは、まず寛容であり、次に忍耐であるとトインビーは書いているんです。これはたまたまロータリアンである皆さんは、もうこの言葉を聞けば、すぐロータリーの考えだと思ふと思うんです。しかし、それはトインビーもそう言っている。

更に、青木保という東大の教授がおりますけれども、この人もまた、こういうことを言っていますね。

21世紀へ向かって文化や価値の違いを尊重しつつ、いかに世界の秩序を形成していけば良いのか、いかにして新たな普遍主義や理念を生み出していけば良いのかといえば、これまでは消極的な価値と見られていた寛容とか他者への思いやり、あるいはコンセンサス主義というものに積極的な価値観を与えていくことではないかと、そういうふうに言っています。例えば20世紀に起こった社会主義思想というような非常に強い思想がありましたけれども、そういうものに比べれば、寛容とか他者への思いやり、そういうのは消極的な価値と見られていたかもしれない。しかし、これからの時代において我々が美徳として持たなければならぬのは、積極的な寛容とか他者への思いやりであるんだと、消極的な価値と見られていたけれども、今後はそれに価値観を積極的に与えていくことではないかと、そういうことを言っておるわけでございます。

私たちは何度も申しますように、ロータリーの中で寛容の精神を学んできたわけでございますけれども、その精神を世界的視野においても守るべきよくなときにきておるんじゃないか。寛容と忍耐というものを真に学ぶことができるならば、今は大変困難な道を歩き始めておると思うんですけども、私たちを力づけてくれる大きな励みになるんじゃないか、そういうふうな思っております。

田中パストガバナー

どうもありがとうございました。時間の配分で本当に申し訳ございません。もう時間がまいりましたので、板橋先生から一言、先生は商工会議所の会頭でもあり、そしてまた法人会の会長さん、実際、事業家として今このような不況の中にあつて、どのような我々にアドバイスをしていただいたらよろしいのでしょうか。ちょっとそのことをひとつお話しただければ……。

板橋パストガバナー

時間も、もう迫っているようでございますので、簡単に申し上げたいと思いますが、こちらの地区では先ほど国分パストガバナーとお話をしておりましたら、新世代委員会が新たに社会奉仕委員会の中から分離独立をされて新世代会議を今年度も続けてい

かれるというふうなお話を伺いました。

私は、私たちの次の世代をどのように共通の将来を築いていくかということ、よくこれもパートナーとして指導していくと。今までどちらかというロータリーの青少年奉仕というのは、1つのこういう例を話して型にはめていくというふうな感じがございましたけれども、新世代会議の考え方というのはそうではなくて、共々将来を創るんだというベースに立ってお互いの意見を交換し合うというふうなことでございます。

そういう形の中で、我々がロータリーで今まで学んできたことを次の世代に移していくということ、これをやはり私たちは真剣に考えていかなければならない。2530地区の今後のそういう青少年教育、教育という言葉は違うのかも分かりません。新世代会議を通じての新しい次のジェネレーションを創っていくことに心から敬意と応援を送りまして、追加の言葉にさせていただきます。

田中パストガバナー

本年度R I会長は、現在の世相に最もふさわしい「ロータリーの夢を追い続けよう」ということの題で私どもに訴えられました。

私たちが今まで歩いてきた道、その道に残してきた道しるべ、今日現在も旅人達に行くべき未来を指し示すことが大切であろうと思います。ノーベル物理学者の湯川秀樹博士は、「1日生きることは一歩進むことである。」と色紙に書かれたということがあります。かのヘレン・ケラー女史は、「希望は人を成功に導く信仰である。希望がなければ何事も成就するものではない。」と申されています。この希望を夢に置き換えれば、正に私どもが目指すロータ

リーの夢の実現への大きな指針ではないでしょうか。

あきらめ、意気消沈、無気力、こういったものからは新しい力は湧いてきません。ロータリアンに元気を出していただこう、ロータリーの夢を追い続けてほしいと、今年度R I会長の訴えをこの機会に、もう一度見つめ直すべきだと思います。

作家の城山三郎さんは、こう言っています。

「だから良くなると考えよう。」

これで、このシンポジウムを終わることにいたします。ご清聴ありがとうございました。

司会

長時間にわたりましてお話ししていただきましたが、ここでパネリスト並びにコーディネーターの皆様方にガバナーよりお礼の言葉を申し上げます。岩崎稠ガバナー、お願いいたします。

岩崎ガバナー

御礼の言葉を申し上げます。

田中善六コーディネーター、本当にありがとうございました。すばらしい3人の先生方を我々にご紹介いただきましたことに深く感謝申し上げます。

また、今日は呉在環R I会長代理先生をはじめといたしまして、5人のロータリーの権化のお話をいろいろとお伺いできたことに深く感謝申し上げ、御礼の言葉とさせていただきます。本年のIMは、「今、ロータリーは子どもたちに何ができるか」と「ロータリーの夢を語ろう」の2つのテーマで行われます。本日拝聴したご高見が道標となることと確信いたす次第であります。

誠にありがとうございました。